

森田康德編

森田康德編

一月三日（火）

娘の小さな手を引いて、バスを降りた。交代乗務員の前を横切って、アルプラザへの横断歩道を渡る。寝起きでもご機嫌に歩いてくれている。

——パンと牛乳と、他に何かいる？

——卵かな。

——了解。

アルプラザは、まだまだ正月気分。ごった返す食品売り場で最低限のモノをカゴに入れ、お利口さんだった亜衣のご褒美にリンゴジュースも。後で芽衣に怒られるかな？ まあ、良いさ。

セルフレジを終え、アルプラザを出る。道なりに茨木川を越え、右に左に歩けば家に着く。誰も居ないつもりだったけど、灯りが点いている？ ドアを開ければ、見慣れない靴もある。

亜衣は空になったリンゴジュースを僕に渡し、自分で靴を脱いで中へ入った。リビングから芽衣と男性の「おかえり」が聞こえてくる。

「ああ、牧人くん」

「お邪魔してます」

芽衣に買い物袋を差し出し、リンゴジュースのパックを流しの脇へ置いた。背中の中のリュックをテーブルに降ろしながら、「ジュース飲ませちゃった。ごめんね」と謝ると「お出掛けだもんね。仕方ないよ」とパックを摘んで捨ててくれた。「お祖母さんどうだった？」

「元気にしてたよ。他のみんなもピンピンしてた」

リュックから、パイナップルケーキ、台湾茶、特別なパッケージのリプトン、南京町でも買えそうな月餅、調味料が出てくる。要らないと言ったのに、作りすぎたお節や手作りスイーツも入っていた。

「そっちはどうだった？」

「長男嫁の予定と映美の話で持ち切り」

「桃子さん、予定日いつだっけ？」

亜衣と戯れている義理の弟に視線を送る。牧人は、亜衣にアクロバットな高い高いを繰り出しながら、「今年のGWです」と答えた。「妊婦を一人にしてよかつたの？」と訊くと、「お義父さんの迎えで実家に行っちゃったんで、姉さんを送って行けって」と言った。

「それはありがとう。パイナップルケーキぐらいしかないけど、一つ持って帰る？」

「あ、じゃあ、いただきます」

要冷蔵の品々は、出した側から芽衣に片付けられていた。三本積み上げられていた山から、一本を牧人の方へ移す。

「ちよつと早いけど、晩ご飯も食べてく？」

芽衣は僕の隣に座り、飲みかけのコーヒーを飲む。僕は入れ替わりに空いたキッチンへ入り、蛇口を捻って手を洗う。

「いえいえ。もうお暇します」

牧人は、亜衣を床に下ろす。亜衣はまだまだ遊んで欲しそうにしがみつくが、

「ごめんね」と姪の頭を撫でながら、牧人は上着に手をかけた。芽衣は亜衣を手招きし、膝の上に座らせる。

「ゆつくりして行けばいいのに」

「ゆつくりしたいんですけど、向こうのお義父さんが『早く来い』らしいので」

牧人は上着を羽織り、スマホの画面を見た。返事を送ったのか、顔を上げた。

パイナップルケーキを持ってきた紙袋にしまい、そのまま玄関へ向かう。

「アレ、クルマ？」

「ええ。その辺のパーキングに」

「じゃあ、ガソリン代と料金だけ」

「いえいえ。また姉さんにはお世話になると思うんで」

玄関まで見送りに来た亜衣の頭を撫で、「じゃあね」と声をかけると、そのままドアの向こうへ出て行った。薄暗がりの中を近場の駐車場へ向かって颯爽と歩いていく。

さてさて、いつもの焼きそばをいつもの分量、作るとしますか。

一月二三日(日)

亜衣の着替えを気かけながら、洗濯物を干している間、早くからウチに来ている敬子が、映美の相手をしてきている。妻の芽衣は朝のスキンケアを終え、敬子と何か話している。

洗濯を干し終え、掃き出し窓から中に入ると、空になった洗濯カゴを芽衣が脱衣所へ持って行ってくれた。一人で靴下も履けた亜衣は、テレビの前に座って熱心にプリキユアを見ている。もうそろそろ、新シリーズの時期。画面の中はクライマックスにふさわしい盛り上がりを見せている。

映美を膝の上に乗せている敬子の向かいに座った。

「保育士も向いてるんじゃない？」

「向き不向きの前に、資格がないから」

「今から取ればいいじゃん。看護師とダブルライセンスなら、引く手数多だろう？」

「保育士、馬鹿にしすぎ。簡単じゃないって」

敬子は、「ねー」と映美に同意を求めた。映美は楽しそうに「ねー」と反応を返す。

「じゃあ、復職すんの？ そろそろ半年でしょ」

「ま、おいおいね」

看護師一筋だったのに、去年の秋頃に離職してから、自由気ままに生活している。手が空いているからと祖母の介護、老人ホームへの入居手続き、祖母宅の整理なんかも任せつきりだから、無碍に「働け」とも言いにくい。

「あ、そうそう。こんなのも出てきたから、今のうちに渡しておくね」

敬子は自分のカバンから、薄い額に入った賞状と手作り感あふれる冊子を取り出した。実家に置いてきたつもりだったが、祖母の家に仕舞ってあったのか。

「あ、懐かし〜」

脱衣所から戻ってきた芽衣は、五冊ある冊子の中から一番上にあつた分を手にとった。無造作にパラパラとめくっていく。

「そこに棚に、飾っておく？」

壁際のカラーボックスに、雑誌が数冊入る隙間は空いている。その上も、賞状

を並べて飾るにはちょうど良い空間がある。芽衣は意地の悪そうな目でこちらを見る。今し方最後まで見た冊子を置いて、次の冊子に手を伸ばす。

「な〜んて、冗談冗談」

「でも、表現者なら恥ずかしがっちゃダメだよねえ」

「お、さすが敬子ちゃん。分かってる〜」

女二人で楽しそうに笑い合う。賞状と冊子をテーブルの片隅に寄せ、端の方にまとめおく。芽衣は時計を見上げて、「さて、あとはよろしくね」と言っ、寝室へ向かった。

敬子はスマホを見て、今来た通知の詳細を読み上げる。

「あつちはエキスポシティで、コーヒー飲んでるって」

「え、もう着いたの？ 流石に早すぎない？」

テレビ画面では、まだプリキュアが踊り始めたところだ。

「ゆっくり待ってるから慌てずに、だつて」

敬子は「とりあえず、了解つ」とメッセージを返した。僕は亜衣と映美の上着を取ってくる。冷蔵庫に貼っていた「フードトラックEXPO」のチラシも外し、万博公園までの道のりに思考を巡らせる。

スムーズに抜けられそうな道をシミュレートしている間に、敬子は僕の手から二人の上着をとって、プリキュアを見終わった亜衣にも着せ始めている。

「じゃあ、行きますか」

敬子の合図で亜衣が玄関に向かう。敬子は映美の手を引いて靴を履かせてくれる。テレビを消し、食卓の上を軽く片付け、車のキーを取って外に出た。

初出 令和三年二月一八日 NNN(旧サイト)にて公開

二月四日（土）

我が家の決して広くはない台所での、二人の調理師によるパフォーマンスが全て終了した。二人はエプロンを外し、髪の毛を解いてお互いを称え合うかのような笑顔を見せ、互いの手を強く握り合った。

土曜日の昼下がりに。普段は妻と僕の大人二人、小さい娘が二人で広さを感じるリビングが、今日はとても狭く感じる。実の姉と妹、僕の両親、なぜか妻の仕事仲間である小野寺さんと、その御母堂が我が家に集っていた。

亜衣と映美、二人の娘は見慣れない人たち、食べ慣れない料理に興奮、圧倒され、お腹が膨れたタイミングですっかり疲れ、眠ってしまった。

台所の姉、郁美は調理器具を片付け始める。それを見て、妻の芽衣が手伝おうと近寄った。

「芽衣さん、ごめんね。勝手に触っちゃって。片付けまでやりますから。香帆さんも私に任せて、休んでください」

郁美の隣にいた相方、香帆さんを向かいのソファへ促した。郁美を手伝おうとする香帆さんを、姉の目配せに頷いて、芽衣がソファまで誘導する。

「じゃあ、お言葉に甘えて。ちよつとだけ」

敬子がお茶を持って、香帆さんの隣に座った。香帆さんの顔を覗き込み、「失礼します」と手首で脈をとっている。少々呼吸は荒そうだが、身体に異常はないようだ。

「君のお母さん、すごいな。ルミさん」

小野寺さんは、「とんでもないです」と首を振った。向かいに座っていた父、康信は「いや、大したもんですよ」とたつぷり響く声で言う。隣の母、乃莉も同意を示す。

「姉さんの独立プロジェクトが、こんな展開するとはね」

「私も二、三週間でこんなことになるなんて、想像してなかったわ」

郁美は調理器具を大方洗い終え、使い捨ての皿を透明な袋に詰め込んだ。我が家の食器は物量の関係で使われなかった。彼女は濡れた手を拭いて、自分のスマホを弄った。香帆さんと二人で作った料理が、スープからデザートまで写真に収

められている。

「EJ用の物撮りは、また今度やろう」

「インスタのブランディングも、今から考えないとね」

郁美はそう言いながら、比較的映えそうな写真をピックアップして、個人のアカウントに投稿する。Facebook、Twitterへの連携も忘れない。

「あとは、いやらしくならない程度にモデルとの写真とか？」

僕の提案に姉は「ゆっくり考えるわ」と言った。ビジネスプラン、市場調査もまだまだコレから。具体的な資金繰りも算段ついてないし、コッチが焦りすぎ、か。

少し落ち着いたようで、香帆さんが食卓の椅子に手をかけた。敬子の手を借りながら、小野寺さんの隣に腰掛けた。

「香帆さん、本当にイイんですか？」

僕の問いかけに、香帆さんは頷いた。

「すぐにフルタイムは身体が追いつかないけど、ちよつとずつ慣らせば大丈夫だろうし」

「香帆先輩の主婦としての経験、ノウハウ、発想も、頼りにしてますよ」

郁美との連携がスムーズなのは、技術のルーツが同じだからだろうか。限られた機材とスペースを活用する術も、栄養のバランスを考えた健康的なメニューを組み立てるのも、香帆さんの知見が生きるのか。

郁美も小野寺さんも、香帆さんも。みんな生き生きしたい表情だった。

初出 令和三年二月一九日 NNN (旧サイト) にて公開

三月一三日(月)

日中は暑かった背広にコートも、二一時だとちょうどいい。もうじきお彼岸だけど、まだまだ三寒四温。今日の暖かさはたまたまだろう。朝から降り続いていた雨は夕方には上がり、傘は広げずに歩けるのもありがたい。

いつもはビルを出たところで分かれる哲郎くんが、今日は珍しく少し後ろを歩いてくる。小柄とは言い難い体格、いつも穏やかな雰囲気を纏っているものの、今日は輪をかけて覇気がない。

「今日は外食？」

哲郎くんはゆつくりと顔を上げる。

「外食っていうか、餃子でも買って帰ろうかなと」

「餃子？ 餃子もいいなあ……」

哲郎くんは「茨木駅の方へ歩いて行こうとする。線路を挟んで王将と大阪王将の店舗はあるが、線路をくぐって右手に曲がった春日商店街にも、餃子の美味しい店はある。とぼとぼ歩く背中に声をかけ、素朴な商店街の餃子バルへ連れていく。テイクアウトのメニューをもらう。店内もそれなりに賑わっているらしい。

「へー。ニンニク不使用なんですね」

メニューを見ていたら興味が湧いてきたのか、ちよつと元気が出てきたようだ。狭いなりにどこも手の込んだ飲食店、飲みどころが軒を連ねている商店街の活気にも釣られ、自分もちよつぴり気が大きくなってくる。

「じゃあ、焼餃子と梅しそ餃子にしようかな」

「それを二つずつと、麻婆豆腐、油淋鶏も」

テイクアウト用の窓口でオーダーを伝え、容器やら袋やらの分け方もパッと決める。あとは出来上がりを待って支払いを済ませるだけ。店内で飲みながら待とうにも、今は満席らしく座れない。

大人しく外で夜風に当たりながら、妻に送るLINEメッセージを考える。

「結構食べるんですね。森田さん」

「なに言ってるんの。君の分だよ」

「えっ？」

哲朗くんが何かを言い足そうと口を開いたタイミングで、出来上がりのお呼びがかかる。財布を取り出そうとする彼より先に、パパッと二人分の支払いを済ませてしまう。麻婆豆腐と油淋鶏の入った方を哲朗くんに差し出した。

「いやいや、流石に悪いっすよ」

「若いのに遠慮すんなって。ほら」

半ば押しつける形で彼の手にした。自分が食べる分もしっかり持った。ただ何か言いたそうな哲朗くんに、さっさと移動して店の前を開けようと手で合図する。

「しつかり食べて、社長をサポートしてもらわないと」

「じゃあ、いただきます」

哲朗くんはまだ何か引つかかっているようだったが、多少素直になった足取りで茨木駅の方へ身体を向けた。

「僕はコッチだから」

茨木駅とは反対の、春日商店街の出口を指差した。哲朗くんは、「あ、じゃあ、おやすみなさい」と軽く頭を下げて、駅の方へ曲がって行った。

その背中を見届けていると、ポケットの中でスマホが震える。さつき送ったメッセージに、「了解です」と芽衣からの返事が届いていた。

広くない一方通行を抜けてくる自動車を避け、月曜日の夜から元気な酔客の間を縫って真っ直ぐ帰路を急ぐ。たまに遭遇する人懐っこい黒猫に遭遇したらどうしようか、期待と悩みとを胸に抱いた。

初出 令和三年四月二四日 NXX (旧サイト) にて公開

三月二十四日（金）

亜衣と映美とを芽衣に任せ、一人でふらつと業務スーパーまで買い出しに行ってきた。途中で蔦屋にも寄り道して、いちご大福も買って来た。自分用にひとつ白餡を入れてもらったけど、取り合いにならないことを祈る。

冷蔵庫の野菜室に、ささやかな買い足しを入れ、冷蔵庫に筍の水煮やらベーコンやらを放り込む。すぐに使ってしまう予定だが、先にウスイエンドウを剥いて、豆ご飯の段取りをしなくては。

買い物袋を片付けながら、ボウルとウスイエンドウのパックを手に食卓へ。教育テレビに釘付けになっている子供たちを眺めつつ、豆を剥くための準備を済ませる。一つずつ取り出しては、背中の丸くなった部分を押す。鞘が僅かに開いたら、隙間に指を入れて中身を取り出す。豆と一緒に付いてきってしまう三角の白い帽子もきつちり外して、ボウルに入れる。

ボウルを軽く振った時に、まだ少し硬い豆同士が中でぶつかる音とか、ボウルに落ちる時の音に、春の訪れを感じてしまうのは僕だけらしく、芽衣の共感を得られたことはない。

一つ剥いては豆を外す。一つ剥いては豆を外す。テンポよく豆を向き、一通り剥き終わったら、鞘を元々入っていたパックに戻し、ボウルは流しにおいて水を入れ、パックはゴミ箱に。

豆を軽く洗ったら、今度は米を三合研ぐ。分量通りに水を入れ、豆を上に入れて、軽く塩を入れる。あとは、炊飯器を信じて、炊き込みモードでスイッチを押すだけ。

「ごめんね。任せつきりで」

洗濯物を畳み終えた芽衣が、キッチンに入ってくる。両手を洗いに流しへ行くうとするのを、手で制する。

「そっちも疲れてるだろ？ オレがやるから」

「いいの？」

「いいよ。ただの気分転換だし」

「じゃあ、よろしくお願いします」

芽衣はサツと食卓に座った。映美を膝の上に置いて、テレビにかじりつく亜衣を眺めながら、手元のタブレットをサツと見る。

両手鍋にたつぷりの水を入れ、ひとつまみの水を入れて火にかけた。換気扇のスイッチを入れ、さつき買ってきたブロッコリーを野菜室から出して水でよく洗う。

この二、三日の間に飲んだ強炭酸水やら、エナジードリンクやらの残骸が目につく。先週の資源ゴミに出したところなのに、年度末の追い込みと鼻炎薬とで、僕の刺激物の摂取が増えている。

武藤さんのところへ入社する日も増やしたりしたもの、久しぶりの本格的な繁忙期に在宅で根を詰めても、中々捗らない。僕はささやかに家事をすることでガス抜きを、芽衣にも何かリフレッシュになるものを段取りしたいが、向こうも向こうでそれなりに仕事が詰まっている。

何かいいアイデアが出ないものか、今度はアスパラの硬い部分を折り取りながら、考える。ポキン、ポキンと、コレもコレで心地いい感覚なんだけど、本数はそれほど多くないからすぐに終わる尊さもある。断面をピーラーで少し削って、あとは軽くソテー、かな。

ボコボコと沸騰してきたところに、ブロッコリーをフサの方から放り込む。あつという間に四月、それからゴールデンウィークがやってくる。今年の花見はどうしようか気かけながら、次の段取りを考えた。

初出 令和三年四月二六日 NNN (旧サイト) にて公開

四月三日（月）

先に車を降りていた芽衣に映美を任せ、僕はチャイルドシートの中で眠る亜衣を抱えて車のキーをロックした。遮光カーテンを下ろし忘れた家の中から、煌々と光が漏れる。

胸の中の娘が起きないように、そつと家の中に入り、寝室の子供用ベッドに寝かせる。僕たちのベッドには、同じように映美が寝息を立てていた。階下からは、芽衣がせつせと戸締りやら明日の支度やらを進めている音が聞こえてくる。寝室のドアをそつと閉めて、リビングへ降りていく。

壁にかけて時計を見ると、午後十時を過ぎていた。当初の想定より二時間も遅れている。妻は部屋干ししていた洗濯物を畳み終えていた。

「ゴメンね、任せっきりで」

「亜衣は？」

「しつかり寝てる。無理言っつて、お風呂入れてもらって正解だったね」

芽衣は肩をすくめ、脱衣所へタオルを持って行った。お風呂にお湯を張るスイッチも入れてくれたようだ。二人の娘は義父さんに入ったけど、僕らの入浴はこれからだ。妻はバタバタしっぱなしで、自分がお風呂に入る支度もテキパキと進めていく。それをジッと見ていると「あなたが先に入る？」と訊いてきた。首を振ると、寝巻きの準備やらタオルの準備やらを進めていく。

僕はキッチンで手を洗い、半ば無意識に冷蔵庫を開けた。

「ビールは一番上、ドアポケットの方じゃなくて奥の方が冷えてるよ」

芽衣は髪を縛っていたゴムを外し、髪を振り解きながら、グラスの場所を指差した。

「芽衣も飲む？」

彼女は給湯器の画面に視線をやり、「いいの？」と言った。

「しつかり冷えてるのは、それしかないけど」

「二人でゆっくり飲めるなら、別にいいさ」

彼女は「じゃあ、お風呂が湧くまで」と条件を付け足し、自分のグラスを持って食卓についた。僕はできるだけ均等になるようグラスに注いだが、泡まで綺麗

にとは行かなかった。軽くグラスを合わせ、一緒にグツと飲んだ。義実家では見
てるしかなかったビールが、全身に染み渡る。

「なんか、おつまみ出す？」

芽衣が椅子に手をかけたが、「いいよ。コレだけでいい」と座るように促した。
僕の隣で、ただビールを飲んでいるのが落ち着かないようだ。微妙にソワソワし
ながらグラスを傾けている。僕はそれを見て、笑ってしまった。芽衣は「何よ
？」とささやかに語気を強めた。

「いや、ゴメンゴメン。任せつきりにならないようにしてたつもりだけど、つも
りでしかなかったなあ、と思つてね」

僕も彼女も在宅で仕事ができるからと、それなりに家事も育児もこなしてきた
自負はあるけど、夫婦水入らずの時間でも、彼女が落ち着かないのは僕が悪い。
つい笑ってしまったけど、笑うようなことじゃなかったな。一人で勝手に反省し
ていると、彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「まうた、一人の世界に入つてる。二人でゆっくり飲みたいんでしょ？」

給湯器が「お風呂がもうすぐ入る」と予告した。彼女は素早く席を立ち、風呂
場の方へ行つて戻ってきた。今度は椅子にしっかりと腰を下ろした。

「蓋はしっかりと閉まつたから、もう一杯ぐらい飲めるけど？」

彼女はニヤリと笑い、グラスに残ったビールを飲み干した。僕は冷蔵庫の前に
立ち、まだ冷えていない五〇〇ミリ缶を取り出して、食卓に戻った。

初出 令和三年四月三〇日 NXX (旧サイト) にて公開

五月一八日（木）

夕食を終え、キッチンで洗い物をしていると、食卓に座ってテレビを見ている芽衣の身体がピクツと動いた。画面に目を向けると、彼女が追いかけているらしいアニメ作品の劇場版が明日から公開されるという告知、CMだった。

アニメとはいえ、少々上の年齢を対象にしているからか、亜衣も映美も特に興味を示すことなく、テレビの前で遊んでいた。

僕は洗い終えた食器を乾燥機に入れ、両手を洗って芽衣の向かいに座った。テレビは二十一時前の短いニュースを写している。

「明日からなんだね」

僕は脇に置いた朝刊を手元に寄せた。適当に開いてみると、さっきの告知が新聞の下の方にも載っていた。紙面には明日以降の上映スケジュールは載っていないようだ。

「行かないの？」

僕はなんとなしに芽衣に聞いた。彼女は頷いた。

「すぐ配信されると思うし、子供らのこともあるし」

彼女は亜衣、映美の方へ視線を向ける。でも、声にはあまり元気がないように思える。

「子供は任せて、見てきなよ」

僕は新聞を畳み、スマホを持った。作品名を検索すると、地元のイオンシネマでもかかるらしい。そのままスケジュールを見に行ったら、意外と日中の枠もある。

「茨木のイオンシネマでもやってるらしいし」

「えっつ、茨木イオン？」

「エキスポシティのところでも、やってるつてよ」

僕は彼女にスマホの画面をむけた。まあ、どうせ行くなら、生活圏内の茨木イオンよりは、もう少し遠いエキスポシティか。彼女は僕のスマホで上映スケジュールを確認すると、URLをコピーして自分宛にメッセージを送信した。

「母の日も何にもできなかったし、今月のおやすみデーもまだだし」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

彼女はいつものように、「日曜日なら大丈夫だよな？」と確認すると、そのままスマホで座席を予約する。クレジットカードで決済も済ませると、ホクホクした顔で娘たちを眺めている。

「たっぷりガス抜きしておいで」と僕が言い添えると、彼女は何か思い出したように「あ、でも」とこちらに顔を向けた。

「パパだけだからって、甘やかしすぎちゃダメだからね」

「分かってる、分かってる」

「なあくんか、ガミガミいうのは私だけ、みたいになつてない？」

気のせいだと思うけどな。声に出していうとまた変なところを刺激しそうだから、曖昧な表情を浮かべて必死にごまかす。単純に接し方の違い、性格の違いなだけに思えるけど、「怖いオヤジ」に程遠いのは確かかも。

そんな風になる頃には、この子らも思春期、反抗期真っ只中だろうなあ……。

僕がぼんやり娘たちの方を見てみると、芽衣は時計を見上げて、ハツとした表情を浮かべる。

「お風呂入れなきや」

彼女は少々慌てて寝室へ上がっていく。キッチンの給湯器が、お風呂がもう間もなく入ると、音声で教えてくれる。娘たちもその音に遊びの手を止め、ママの準備を確かめると玩具を片付けていく。

芽衣は、亜衣が片付け終わるのを待つてから、映美と亜衣の手を握った。

「じゃあ、入ってきます」

「よろしく」

芽衣は二人の手を引いて風呂場に向かった。僕は二人が片づけきらなかった玩具をしまい、リビングに軽くフローリングワイパーをかける。さつきは水の音でよく聞き取れなかったテレビCMがよく分かる。今度の日曜日、僕らは何をしようかな……。

初出 令和三年五月一八日 NXX(旧サイト)にて公開

五月三〇日（火）

武藤さんは、オフィスの隅に綺麗に積み上げられた雑誌の束から、一番上の一冊を手にとった。表紙をジッと見つめ、嬉しそうな表情を浮かべている。

「うん、イイじゃん。香帆さんの絵がまた、文芸誌っぽくてイイね」

彼は装丁を一通り眺めると、応接スペースでコーヒーを飲みながら待っている朋子さんにも、ヒイラギの創刊号を手渡した。彼女もしっかり表紙を眺めると、早速パラパラと中を開いた。

「うん。イイんじゃない？ マンガからエッセイから、小説に短歌、川柳まで。ちよつとちやちなところはああるけど、雑誌として纏まつてるのに、グチャグチャなラインナップが最高じゃない」

「個々の作品、文章も、パッと見は特徴ないと言うか、読みやすいぐらいなのに、根底の隠しきれない異常さというか、掴みきれない背景みたいなのが行間に滲んでる感じもあつて、イイね。印刷物として縦書きで読むと、より一層、グッと来る」

「イイ同人誌じゃない。編集長さん」

「うん。最高だよ、森田さん」

武藤さん、朋子さんに異様に褒められて、めちゃくちゃ嬉しい。

「いえいえ。朋子さん、小野寺さんのお力添えあつてこそ、ですよ。武藤さんにも助けてもらいましたし」

朋子さん、小野寺さんに書き手の年代別に取りまとめてもらったから、形になつてるし、武藤さんたちの出資があつたから、いきなりオフセット印刷で一〇〇部も印刷してもらえた。

「いやいや、編集長のプロデュースというか、底知れないヤバさみたいなのがココに詰まつてるから、コレはこうやって成り立っていて、強烈なインパクトがあるんだよ」

「そうね。表向きはちゃんとお行儀良くてお上品なのに、計り知れない野性味というか、偏執的な変態性も薄まつてない。こういう雑誌が読みたかったのよ」

ヒイラギには、目の前の二人の作品、文章も掲載してある。褒められているの

かどうかよく分からないけど、あなたたちもその一角ですよ？ 自覚があるのかないのかは分からないし、褒め言葉かどうかもよく分からないけど、黙ってニコニコしておこう。

「一旦、隔月目標で進めてみますか」

「そうね。定期購読メインで読者と部数、書き手もまだまだ募って、どんどん部活的に広げる、育てる方向で頑張りましょう」

「ということ、編集長、引き続き、頼みますよ」

まだ何も言っていないのに、二人はほとんど先へ話を進めていく。まあ、どうせやるからには、こういうイケイケな人たちにある程度走ってもらいながら、こっちはこっちでじっくり練り上げるぐらいがちょうどいい、か。どうせ、一〇〇部は捌かなきゃいけないし、しばらくは同人誌扱いとはいえ、徐々に仕事として向き合うためには地道に掘げなきゃいけない。

「曲者揃いの、読む人を選びまくりそうな同人誌か」

「ここから派生して、憧れと信頼起点の情報発信、責任ある言論空間も作れそうじゃない？」

「ああ、例の河童みたいな」

「そう。狂人による狂人のための狂気の価値空間作り」

「ちよっと前に流行った、インフルエンサーのカウンターパンチャーっぽいですね」

「でしよう？」

まだまだどうやつと体裁を整えて創刊号を擦り終えただけの雑誌に、彼らはほとんどん夢を背負わせていく。既存の出版物、メディアとは相当毛色の異なる路線にはなりそうだけど、そこまで持っていく責任が、僕やこのヒイラギにはあるってことか。

人の世界とは価値観が異なる河童の国。とんでもない世界の入り口、きっかけを作ってしまった気もするけど、それで喜ぶ人がいるのならどんどん狂って見せるぞ。

初出 令和三年五月二〇日 NZZ (旧サイト) にて公開

六月七日（水）

武藤さんは隣でSlackの新作メッセージを見ながら、「だつてさ」と他人事のようには僕の顔を見ながら言った。

「編集長もやり、作家もやり、人気だねえ。森田先生」

「先生はやめてくださいよ」

「人気のところは否定しないんだ」

彼は人の悪そうな笑顔を浮かべ、ニヤニヤしている。

瑞希さんから送られてきたのは、自主制作映画に関する相談。学校の課題とは別に、もう一本自主制作映画を作りたいのだけれども、脚本の執筆や協力、監修について相談したい、とのことらしい。

「映像作品の脚本までできるの？」

「自主制作レベルなら、経験ありますよ」

一人でプロデュースから脚本、演出から監督、制作進行までやって、結局グダグダのまま終わったあまり思い出したくない経験。結局、脚本の着手が遅れたために、中身のクオリティが今一つのまま、映像としてもお粗末なものにしかならなかった。

そのリベンジ、やり直しをいつかしたいと思って、早十年以上。そろそろ、やってみてもいいかなとも思いながら、結局仕事が忙しいと言い訳をしながら、ここまで来てしまった。

「で、やるの？」

武藤さんは少し険しい表情で僕を見る。

「彼女らにも助けてもらってるし、個人的にリベンジもしたいんでやりますよ。できる範囲を決めて、手弁当で、ですけど」

実際に「ヒイラギ」の創刊にあたって、書き手の募集を手伝ってもらったし、沙綾さんの知名度や女子大生の華やかさでアクセスなり、部数なりが積み上がっているのも事実。無償でやったって、利は十二分にある。

「でも、タダではやらないですよ。お互いのために」

武藤さんが横からグッと釘を刺す。手弁当、タダでやった時の不幸を知ってい

るからこそ、正しいご意見。自分も沢山経験がある。

「今は出世払いつてことにして、ちゃんと記録してから回収しますよ」

「貸付なら、利子も忘れないように」

「分かってますって」

どういう関わり方になるかはまだ分からないけど、ざっくりの見積もりを早めにしておいて、なぜそういう取り決めをするのかも、きちんと説明して合意を取ろう。

とりあえず、Stackのメッセージに、都合の良い日を三つぐらい上げて返信しておく。関係しそうな哲朗くん、浪川さんもメンションに含めておいた。

「これで浪川さんに箔がついたら、ますます面白いことになるね」

武藤さんは自分のモニターを見ながら嬉しそうに言った。

「ヒイラギもコレも、いつもの仕事も、よろしく頼むよ」

武藤さんはシレットというが、Webメディアの運営に、掲載作品の執筆、若手の育成に紙媒体の頒布拡大、新人作家の獲得に掲載者間の交流もやりながら、Web制作の業務委託という現状も、それなりに一杯いっぱい状況ではある。そこにもう一個新しい制作事業が乗つかるとするのは、中々大変な仕事ではある。

「新人さんとか、入れないんですか？」

「人手を増やすのは良いんだけど、教育がね」

「ヒイラギを手伝ってもらいながら、哲朗くんらと伸ばすっていうのは、ダメですかね」

武藤さんは腕を組み、上を向く。

「コードとか、デザインとか、ツールを覚えてもらったとして、そこから先が問題だよなあ……。うん、真剣に考えてみよう」

武藤さんは白紙の紙を引き寄せて、ペンを取り出した。真剣な面持ちでいろんなキーワードを書き出していく。資金繰り、事業計画の面でもう少し具体的な支援ができれば良いんだろうけど、僕に何ができるだろう？

取り急ぎは法人成り、とかか。ここからもう一段踏み出すためには、そろそろ必要かもしれない。考えをまとめている武藤さんを眺めながら、僕も僕で真新しい紙を引っ張り出した。

六月一六日（金）

「森田さんもいつか、茨木を出ていくのかな？」

武藤さんはコーヒーを入れ、応接スペースに戻ってきた。その顔には、割と本気っぽい寂しさが漂っている。

「確定じゃないですけど、ないとも言い切れませんね」

「そっか。そのときは、寂しくなるな」

彼は心底悲しげに、コーヒーを啜った。

「でも、せいぜい池田ですよ。陽菜ちゃんの通学と似たようなもんですって」

僕はなぜか必死になって取り繕う。リモートワークも充実して久しいこのご時世に、ほんの少し距離が生まれる程度で何が寂しくなるのか。分かるような気もするけど、分かりえない気も少しある。

実際、今も別に近いと言えるほどの距離感ではない。ココのオフィスまで、徒歩で三〇分くらいはかかる。武藤さんのご自宅までは、さらに二〇分ちよつと。

それがグツと伸びて離れたところで何が変わる？ 何も変わらない気もする。

「両親もそろそろいい年だし、亜衣もそろそろ小学校なんで、学校に上がってから転校するぐらいなら、今のうちにじっくり考えなきゃなあ、と」

「そうだよなあ。森田さんは元々池田の人、だったもんね」

武藤さんはしみじみと語る。

ただ、僕らや武藤さんたちの時代とは違い、別に池田と茨木とで大きな違いはない。花の第一学区だった時代はとうの昔。今はそんなの、関係ない。関係ないとは思いつつ、父母の今後を考えると、同居は僕ら一家になるだろう。だったら、早めに決めて向こうで暮らすことも考えなきゃいけない。

「それも、茨木つぼいと言えば茨木つぼいのかな」

「どこからかやって来て、定着する人は定着して、そうでない人はどこかへ出ていく」

「出戻って居着く人と、出戻りながら、もう一度出ていく人もいる。茨木は特に、それがしやすいのかもなあ……」

地元で生まれ育った人も、地元縛られることなく自由に出入りする。地元愛、

郷土愛がないんじゃないかと、そういう緩やかな器、雰囲気はココにはある。

「だから、『今を切りとれ』か」

「そして、『撮りたい表情、景色を撮れ、捻り出せ』ですね」

武藤さんは、僕の言葉にニヤリと笑った。

浪川さんの要望を叶えるなら、彼女が撮りたいものをとことん撮るべきだ。そして、その題材は恐らく、奥野沙綾という人物以外にない。だったら、気を銜わないベタベタなシナリオをベースに、監督と主演女優がやりたいようにやって、紡ぎあげたものをブラッシュアップする程度でいい。

武藤さんは、浪川さんがロケハンで撮ってきた川中心の写真を手元に引き寄せ
る。

「川物語が完成したら、次は山物語だな」

僕は思わず微笑んで、「ですね」と付け足した。

なんだかパチンコ、パチスロみたいなネーミングだけでも、山間部の話、イバキタを舞台にした作品があると、より魅力的になっていいかもしれない。

「おや？ 森田先生？」

武藤さんは僕の表情から何か読み取ったのか、何うような目で僕を見る。

「もう一班スタンバイして、ガチの山物語、作っちゃおう？」

彼は底意地が悪そうな表情を浮かべ、僕に語りかけた。

キャストと機材があれば、シナリオと監督次第で作れなくはない。若手の作品だけっていうのも寂しいし、勉強がてらやってみてもいいかもしれない。

武藤さんの悪そうな笑顔に、僕も無言で笑いかけてみた。

初出 令和三年五月二四日 NXX (旧サイト) にて公開

七月一六日(日)

野村さんと芽衣は、娘たちを伴つてもう一回ローラーコースターのスタート地点へ帰っていく。何回目か分からないぐらい、何度も何度も繰り返し滑り降りている。

最初に音を上げたらしい小野寺さんが、遠くで見守っていた僕のところへやってくる。僕は彼女にクーラーボックスから麦茶のペットボトルをとって差し出した。彼女はそれを受け取って日陰に入り、額から流れ落ちる滝のような汗をタオルで拭った。

「お疲れさん」

彼女はかすれた声で「どうも」と言い、ペットボトルの蓋を開けて一気に半分ぐらい飲み干した。

「昨日はプールに行つてたんだって？ 野村さんから聞いたよ」

幼馴染みとはいえ、二日続けて友達母娘のお出かけに付き合つてやるなんて、いい人なんだろうな。小野寺さんはかなり疲れた様子でコミュニケーションもほどほどに、ベンチに腰を下ろした。蓋をしたペットボトルを額に当てて、随分暑そうにしている。

僕は家から持ってきたプラスチックの団扇を取り出し、彼女に風を送った。

「ありがとうございます」

僕はストックの団扇を差し出したが、彼女はやんわりと断つて、自分のカバンから小さな扇風機を取り出した。百円均一でも買えそうな、電池で動くタイプ。文明の利器があるのなら、団扇はいらなかつたか。

「首にかけるタイプも流行つたっけ」

「ありましたね、そんなの。でも、私にはコレが合うっていうか」

小野寺さんの掌に収まっているそれは、少し年季が入っているように思えた。独特のブーンという小さな音が、僕と彼女の間を埋めてくれる。

彼女は微妙な居心地の悪さも飲み込むように、もう一口お茶を飲んだ。遠くの方で点のように見える野村さんや芽衣の方へ視線を向けたまま、口を開く。

「で、どうですか、ヒイラギの方は」

もうそろそろ二回目の冊子が刷り上がってくる同人誌のことを切り出した。聞いてきたのは紙媒体の仕上がりによりは、先行して掲載しているウェブメディアの方だろう。

「順調、とは言い難いかもね。伸び悩んでるといふか、反応が思ったほどないといふか」

彼女や彼女の勤め先にも編集を手伝ってもらっているし、お母様に表紙の絵を頼んでいる手前、もつと部数が増えるような動きを取りたいところだけでも、メディアの作風や内容のせいかな、どうにもこうにも手応えというものに乏しい気がする。

今回も百部で刷ってもらったけど、大量の在庫を抱えるほどでもなく、増刷や初版を増やすほどの兆候があるわけでもなく。双方の編集長としては何かしたい気もするが、始めたばかりで右往左往するのもよくない気もする。

「濃い目の作風ですもんね。読み手も選びますし、ご新規さんをどんどん獲得するようなメディア、同人誌じゃないですよね」

それにしたって、もうちょつと伸びてもいい気もしている。届くべき人に届いて、もう少し読み手のボリュームを確保できれば、具体的な次の手も考えられそうなんだけど。

小野寺さんは滑り降りてくる野村さん母娘に手を振ると、椅子から腰を上げた。「もう少し焦らず、このまま続けてみましょう。油断は禁物ですけど、焦りも禁物です」

彼女は笑ってそう言うと、クーラーボックスから未開封のお茶を何本か持って日陰から日向に出て行った。

初出 令和三年七月二〇日 NNN (旧サイト) にて公開

七月一七日(月)

いつもより一時間早めに起きて、子ども達とバタバタし始める前にウェブサイトのアクセス状況を確認する。昨日、小野寺さんと話した通り、アクセスの伸びは芳しくない。絶対数がそれなりにあるかと言われると、それもそこまでであるとは言えない。

サイトも自分たちで作ったし、構造自体は技術的に間違いないものを入れたつもりだし、デザイン的にもそんなに特異なものにはしていない。検索エンジン対策もちゃんとできてるから自然検索での流入もあるわけだし、リピートユーザーもいるんだけど、新規ユーザーが根付いている感がどうにも弱い。

キッチンの方から、芽衣が朝食の準備をしている音が聞こえてくる。僕は作業を一旦切り上げ、芽衣の手伝いと亜衣の朝の支度をフォローすることにした。芽衣のやりたいことがスムーズに運ぶように手伝い、亜衣や映美の要望が無理なく通るようにちょっとだけ手を添える。全員がやりたいようにやれるようサポートしながら、僕は僕で朝食をお腹に収め、子ども達や妻の身支度の合間を縫って洗面所で歯を磨き、髭を剃った。

亜衣を幼稚園に送り、家に戻ってコーヒを淹れているとあつという間に十時前。そろそろ打ち合わせの準備に手を付ける時間。

しかし、資料の方向性、施策や提案が全く思い浮かばない。アクセス状況なんてみんなで共有しているし、そこからパッと見える答えなんてみんな大体一致している。ここから一步踏み込んだ分析、提言が肝心だろうに――。

「――お腹が痛いなら、整腸剤は薬箱の中だよ」

映美に読み聞かせをしていた芽衣が絵本から顔も上げずに言った。

「別に、どこも痛くないよ」

「そう？ 朝からずーっと難しそうな顔をしてるから。そういう表情は、いつも通りだっけ」

芽衣は顔を上げて笑った。

彼女の言う通り、僕が眉間にシワを寄せて考え込むのはいつものことだけれども、彼女に茶化されるのは久しぶりな気がする。

「芽衣の個人漫画より、ヒイラギの方が伸びてないから、どうしようか悩んでね」

「そりゃあ、ポツと出の同人誌と比べられるようなモンじゃないからね」

それは、そうか。中身のクオリティ以前に、そもそも始めたばかり。自己評価が高すぎて、自信過剰になってただけかもしれない。

「目先の成果主義に走らないって始めたんなら、もうしばらくどっしり構えて、そのまま自信過剰にいいもの作ることだけ考えたら？」

全く持つて、彼女の言う通りだ。「いつもの仕事」の癖で捉えちゃうから間違える。コレはそういつた諸々のアンチテーゼとして始めたところもあるんだし、多少手応えがないぐらいでビビってても仕方がない。

「どう？ 気分は晴れた？」

「ああ。ありがとう」

芽衣は映美に急かされて、読み聞かせに戻って行った。僕は淹れたてのコーヒーを飲みながら、二人のやりとりをぼんやり眺めている。

あくまでも同人誌だし、一人で答えを出す必要もない。みんなですっちゃかめつちやかになりながら意見を集約したって問題ないんだ。そういう打ち合わせをするのであれば、資料の構成は――。

初出 令和三年七月二〇日 NXXN (旧サイト) にて公開

八月一六日（水）

目の前に見えてきた交差点を、たこ焼き屋さんのある方へ渡る。このまま道なりに行っても問題なく駅には着くけど、微妙に遠回りになる。僕の前を歩く親子みたいな女性二人は、後ろを気にすることなくおしゃべりし続けていた。

「今からでも、うちのサロンでバイトしない？」

朋子さんはさつきから延々と、鈴木さんを口説いている。さつき受けたマッサージは確かに即戦力だろう。朋子さんの手ほどきを受ければ、のれん分けも早そう。朋子さんの支援、プロデュースも女性起業家としては魅力的だろう。

鈴木さんは鈴木さんで、やんわりと誘いを断り続けている。駅の真下まで来ると流石に朋子さんも諦めたらしい。口説くのをやめて、鈴木さんに名刺を差し出した。

「卒業後でも就職した後でも、気が向いたらいつでも連絡しなさい。人生、あなたが思ってるより、ずっと長いんだから」

鈴木さんはやや苦笑いをしながら、「ありがとうございます」と名刺を財布に仕舞った。僕のことなんて忘れていたんじゃないかと思っていたけど、朋子さんは僕の方へ振り返った。

「それじゃあ、私はお酒を見て帰るからココで。奥さんにもよろしくね」

彼女は僕の返事を待たず、颯爽と隣のやまやへ入って行った。僕はその背中に軽く頭を下げ、一足先に改札へ向かうエスカレーターに乗っていた鈴木さんの後についた。彼女は二つ下のステップに立っている僕の方へ微笑んでくれる。

「勝手にマッサージしちゃいましたけど、大丈夫でした？」

エスカレーターから降りながら、彼女は優しい声で僕に訊いた。ㄩサイズのオフイスを出てからここまで歩いてきたけど、特に痛いところや具合が悪そうなどころは出ていない。このところ、何となく滞っていた何かが無くなった気がして、ちよつぱり軽い気もする。

「いいマッサージだったよ。こっちこそ、急におじさんの身体を触らせてごめんね」

朋子さんが即戦力だと口説くぐらいなら、タダで受けて良かったのだろうか。

高校生の頃、「本気で習いに行つた」と言っていたぐらいだから、習得するまでの費用もかかっていたはず。

「マッサージのお礼、本当にいいの？」

終わつた直後にも訊いたけど、彼女は「素人の手遊びですから」と再び断つた。

「あそこのケーキとか、そこのお茶ぐらいなら」

僕は改札横のケーキ屋さんや、改札の向かいにある喫茶店を指しながら言った。鈴木さんは案内表示を横目で見ながら、なんとなく居心地悪そうな笑みを浮かべている。

「引き留めちゃつてごめん。気持ち悪かつたよね」

「気持ち悪いだなんて、そんな」

鈴木さんは全力で否定してくれる。

「執筆の機会を提供いただいて、感謝こそすれ、気持ち悪いだなんて思ったこと、一度もないです。あのマッサージも、全然足りないと思いますけど、そのお礼の一つですから」

京都市の次の電車が入ってくるというアナウンスが流れた。鈴木さんは「失礼します」と頭を下げ、足早に改札を通り抜けていく。僕は彼女が風のように去っていく様を見届けていた。姿が見切れる前にこちらを振り返り、もう一度頭を下げてくれた姿がとて眩しく見えた。

初出 令和三年九月二四日 NXX(旧サイト)にて公開

九月八日（金）

「おかえり〜」

マイバッグを肩にかけてリビングに入った僕へ、芽衣が声をかけてくれた。さつきまで映美とお昼寝でもしていたのか、まだ眠そうな顔をしている。映美の方が元氣そうに、目を大きく開いていた。

野暮用ついでに買ってきた翌朝分のヨーグルトと食パン、子供たちの牛乳を冷蔵庫にしまう。もうそろそろ亜衣を迎えに行く時間帯だけれども、おやつタイムには少し早い。僕は一旦冷蔵庫を閉めて、手を洗うために蛇口を捻った。

血の巡りが悪いのか、曇り気味の微妙な低気圧が作用しているのか、芽衣は状態こそ起こしているものの、珍しくポーツとしている。手元のタオルで両手を拭い、水切りカゴに伏せてあったコップをカウンターに並べた。冷蔵庫から麦茶のポットを取り出して、食卓まで運ぶ。

映美は器用に自力で椅子によじ登り、僕がよく冷えたお茶をコップに注ぐのを大人しく待っていた。僕は自分が飲む分と、芽衣の分もコップに注ぎ、映美にコップを渡す。彼女が零さないか見守りながら、自分の喉も潤した。

映美は空になったコップを僕に差し出した。「おかわり？」と訊くと、彼女は頷く。言われるがままに半分より少し多めに注ぐと、彼女はさつきと同じ勢いでググツと飲み干した。

お茶をひっくり返すことなく、コップを食卓に戻す映美に笑いかけながら、芽衣は隣の椅子に腰を下ろした。誰も手をつけていないコップを手にとると、一口で半分ほどを飲んだ。僕は減った分を継ぎ足した。あつという間にポットのお茶が尽きかけている。

僕は冷蔵庫を開け、ドアポケットを確かめた。すぐに次のお茶を沸かさないと、亜衣が帰ってきた時にはなくなりそうだ。雪平鍋に水を張り、換気扇とコンロのスイッチを入れた。

ストッカーの中を探り、麦茶パックを取り出した。予備のポットは食器棚か。回転が速いから大丈夫だろうけど、一度蓋も解体してサツと水で洗う。角の方も届く範囲で手を入れて、もう一度濯いだ。蓋と共に水切りカゴへ伏せて、水の沸

騰を待つ。

芽衣は僕が椅子に置いたマイバッグに手を入れ、残っていた荷物を外へ出した。出てきたのは、USBメモリと中身が入ったクリアファイル。彼女はクリアファイルの外から中の書類を眺め、裏から透けて見える中身を隙間から覗こうとしている。

「見ても良いよ」

芽衣は、「先に見ても良いの?」と言った。先も何も、僕は印刷した時点で既に見ている。僕が頷いて返すものの、彼女はこちらを一切見ることもなく、嬉しそうに二つ折りの紙を開いた。芽衣は大きく頷きながら、「へー、これが月末に印刷されるんだ」と言った。

「実際はもうちょっと小さくなるみたいだけどね」

先日受け取ったPDFを、設定通りにA3で印刷してみたものの、コピー機の設定のせいでわずかに縮小されている。タウン誌の実物はさらに一回り小さいものの、画質は今見ているものより上がるはず。

「ヒイラギのことも触れてくれるんだ」

芽衣は、文末の方へ視線を向けた。確かそこには、瑞希さんたちの動画チャンネルや、そこまでのQRコードなんか載っていたはず。上坂さんとの記事ということで、ヒイラギのURLやQRコードも載せてくれていた。

「ちよつとずつだけど、みんなが協力してくれてありがたいね」

芽衣の優しい笑顔に見惚れ、完全にお湯が沸き立っているのを見逃してしまった。次号の部数を上げるか検討している話や、少しずつ収益が上がりそうな話もしたかったのに、色んなものを吹っ飛ばしながら、ひとまずコンロの火を止めて、麦茶パックをお湯の中に放り込んだ。

初出 令和三年一〇月二三日 NXX(旧サイト)にて公開

九月二八日（木）

ハッピーアワーというには早過ぎる時間帯にも関わらず、地元醸造のビールスタンドは賑わっていた。表にこそ待合席を兼ねたベンチが置いてあるものの、一階の入ってすぐのスペースも、ちよつと急な階段を登った先の二階のスペースも基本的には立ち飲み席しかない。

それでも、いくつか設置された無骨なテーブルは半分以上埋まっていた。カウンターにはりついて、店主や店員とズーツと喋っている人もいる。「どれにする？」

僕を先導して来た武藤さんが、カウンターのメニューを指した。個性的な名前とそれぞれの特徴が書いてあるものの、違いはよく分からない。悩んでいる僕に、お店の人がそれぞれ解説してくれるものの、クラフトビールに明るくない身には、イマイチピンとこない。

「じゃあ、二番で」

「どうやら一番スタンダードっぽいものを選ぶ。武藤さんはメニューを見て、

「一番新しいのは、コレだっけ？」と店員さんに確かめる。

「じゃあ、二番とソレを大きい方にしちゃう？」

武藤さんは心底楽しそうに、ニヤニヤと笑っている。

「一応、まだ仕事するんですね？」

「だいたいじょうぶだつて。度数は高いけど、ビールの一杯や二杯」

武藤さんはカウンターの店員さんに「ねえ？」と同意を求めた。オーダーを待つ彼は、曖昧に笑って受け流す。結局、武藤さんは「どっちも大きい方で」と押し切ると、二人分の金額を現金で支払った。

すぐに大きなグラスにビールが注がれ、カウンターの向こうから差し出される。

「それ、森田さんのだから」

武藤さんはすぐ後ろのテーブルを指して、「そこで、いい？」と店員さんに確かめた。向こうは、もう一杯のビールを差し出しながら、「どうぞ」と応えた。

「じゃあ、オレがこっちにしようかな。森田さんはそっちでいい？」

彼はカウンターの真後ろに陣取り、僕はその隣、壁を背にする位置に立った。

「カッコ良かった奥さんと、肚を決めた森田さんに」

武藤さんは僕の準備や反論を待たず、一人で僕のグラスに乾杯し、早々にビールに口をつける。喉を鳴らしながら、最初の一口でグイグイ飲んでいく。

「いやあ、美味いつ。お彼岸も過ぎたけど、最高だよね」

彼にワntenポ遅れる形で慌てて一口飲んでみる。ガツンと強めの苦味が確かに美味い。「いつも、ありがとうございます」と店主の奥さんらしい人が、うずらの燻製らしきものをテーブルに持つて来てくれた。武藤さんは自然に爪楊枝を取り、一個を口に放り込んだ。彼の圧に負けて、僕も同様に後追いつする。

「本当にやりたいよね、一万部。可能なら、もう一桁」

「まあ、まずは千部をクリアしなきゃですけど」

「行ける、行ける。肚を括った編集長が、弱気でどうする」

武藤さんは、少々強めに僕の背中を叩いた。まだビールを一口飲んだだけなのに、さつきからかなり酔っ払っているような気がする。僕は自分のビールを零さないようにバランスを保ち、少しでも中身を減らすべく口をつけた。

普段より少々声の大きい武藤さんが気になるのか、店員さんが僕らの話に、興味深そうに耳を傾けている。

「自分たちの手作り文芸誌で、十万部目指そうとしてるんですよ」

「十万部ですか？ ソレはスゴいですね」

著名な文芸誌、雑誌もそんなに売れていない中、今月やつと五百部刷った同人誌が十万部は夢のまた夢。流石に吹聴しすぎだと止めにかかるが、「いいじゃないですか。目標はデッカク行きましようよ」と店主がキラキラした目で肯定してしまう。

コレはどうやら、とんでもないことになりそうだ。

初出 令和三年一〇月二五日 NXX (旧サイト) にて公開

一〇月一〇日(火)

亜衣のベッドで二人とも深い眠りに就いてしまった。やっとぐっすり寝てくれた映美を起こさないようにそつと抱き抱え、隣の彼女のベッドにゆっくり下ろす。寝冷えしないように布団をかけ、亜衣の方も布団をかけ直す。

この間までタオルケットも蹴飛ばしていたのに、次の週末あたりから毛布も出すかどうかという気候らしい。日中の暖かさはまだしばらく続くらしく、秋らしい秋を感じられないまま、パツと冬らしい装いにするのも二の足を踏む日々が続きそうだ。

煌々と点いているLED照明を、常夜灯に切り替えた。照明用のリモコンを、ドア横につけたスタンドへ戻す。しばらく子供部屋のドアに手をかけたまま、二人の様子をジッと確かめる。どうやら本当に寝入ったらしい。音を立てないようにゆっくりドアを閉めた。

「お疲れ様」

飾り付けが済んだままのリビングへ戻ると、芽衣が椅子に腰掛けたまま振り返った。

「映美も随分、重くなったな」

「そう？ そんなに変わらないと思うけど……」

さつきそつと持ち上げた時は随分重く感じたけど、僕より抱きかかえる頻度の多い彼女がそういうのなら、彼女の方が正しいのだろう。

「まだまだ衰えるのは早いよなあ」

僕は自分の両腕をさすりながら、芽衣の向かいに座る。彼女は頷きながら、

「仕事もプライベートも、まだまだコレだからだね」と付け加えた。

「心も身体も鍛えなきゃ、か」

僕は椅子の前に置いたままの、娘たちからの手紙を開いた。まだまだ拙い字による一言メッセーじと、自由奔放な線で描かれた似顔絵が添えてある。

「鍛えなきゃなら、要らない？」

いつの間にかキッチンの方へ移っていた芽衣は、朋子さんから頂いた高そうなウイスキーを僕に見えるように掲げていた。

「要る要る。鍛えるのは飲んでから」

芽衣は箱のままのウイスキーと、背の低い分厚いグラスを二つ持って戻ってきた。僕は彼女から箱を受け取り、中の瓶を取り出した。中身は、シングルモルトのとても高そうなウイスキー。

とりあえず一口、ストレートで口に含んでみる。中々刺激的な味わいが口の中に広がり、喉に熱さが駆け抜けていく。口から吐く息も独特の香りを含んでいるような気がする。

芽衣は、常温の水とつまみのナッツを持ってきた。彼女は自分のグラスにいくつか小さな水を入れて、ウイスキーを注いだ。僕は再びウイスキーを少し注いで、同量の水を注ぐ。さつきより味わいもアルコールも柔らかくなって、甘いバナラのような香りが膨らんだ。

「うん。美味しい」

芽衣はウイスキーを一口飲み、ナッツを口に放り込んだ。僕はキッチンに入り、冷蔵庫からよく冷えた炭酸水と、食器棚から空のコップを取り出した。食卓に戻って、常温の水を空のコップに移す。ハイボールを作る前に、コップに入り切らなかったペットボトルの水を飲み干した。

「朋子さんに、いい感想書けそう？」

芽衣の呟きに、一瞬キャップを開ける手が止まった。彼女からもらった万年筆の箱が視界に入り、微かにざわついた心を静める。グラスにウイスキーを注ぎ、瓶に蓋をした。

「書くさ。コレの感想も、今日の話も」

万年筆の箱を手元に引き寄せ、箱の上から矯めつ眇めつ、それを眺める。まだまだ課題は山盛り。本当に、鍛えて鍛えて鍛え抜かねば……。

初出 令和三年一〇月二四日 NXX (旧サイト) にて公開

一月九日(木)

安藤さんの手元のカップにも紅茶が注がれた。アップルフレーバーの紅茶で口を少し湿らせ、朋子さんに出していただいたフォークでアップルパイを一口サイズにカットして口に運んだ。

「うん、美味しい」

ちよっぴり緊張して反応を待っていた朋子さんより先に、安藤さんが感想を漏らした。ティーカップを手に取り、紅茶を一口飲む。「紅茶との相性も抜群だな」

朋子さんのサロンではあまり耳にすることがない、ボリュームと迫力のある声に少しビクついてしまう。朋子さんは、安藤さんに向けて口の前で指を立て、ボリュームを下げるように要請する。

隣で安藤さんが反応している間に、朋子さんはゆっくり味を確かめながら、頷いた。一瞬の沈黙が非常に長く感じる。僕は思わず、「お口に合いましたか？」と訊いてしまった。

「非常に美味しい」

朋子さんの評価に、ひとまず胸を撫で下ろした。僕が作った訳でもないのに、妻の名代として妙に緊張してしまった。静かにゆっくり息を吐いて、緊張感を外に出していく。

「私にはちよつと甘い気もするけど、アップルパイだもんね。これぐらいで丁度いいわ」

「味にうるさい朋ちゃんが太鼓判とは、珍しいね」

「味にうるさいとは失礼ね」

安藤さんは、「事実だろうか？」と朋子さんに突っ込んだ。著名なガイドブックで星を獲得したお店に連れて行って、ボロクソに言われた経験があるとかないとか、誰かに聞いたような気もする。

言い方には二人とも微妙なトゲがあるものの、表情や雰囲気はとても和やかだ。こんなに楽しそうにしている朋子さんは、僕は見たことがない。安藤さんがいるからこそその反応なのだろう。

朋子さんとのやりとりが一息ついたのか、安藤さんは僕の方を見た。

「私までお相伴させてもらって、ありがとうございます」

「ああ、いえいえ」

「プレゼントとかケーキとか要らないって言ってたのに、わざわざすみません」

朋子さんにも、「いえいえ」とおうむ返しに深々と頭を下げた。朋子さんは安藤さんを指差しながら、「この人なんて、前々から来るって言っておきながら、手ぶらで来てるんですよ。おまけに、芽衣さんのアップルパイまで」と言った。

「だって、要らないって言うから」

安藤さんはちよつぱりむくれながら、朋子さんに反論する。

「要らないって言っても、こうして持たせてくださるんだから、素晴らしい奥さんよ」

「素晴らしい奥さんっていうのは、間違いないね」

安藤さんは大きく頷きながら、もう一口アップルパイを口元に運んだ。

「やっぱり、お姉さまとお母さまからの指導もあつて？」

朋子さんはティーカップを両手で包みながら、僕に訊ねてきた。一瞬何のことかと思っただけ、すぐにアップルパイのレシピのことだと理解した。

「ああ、いやコレは彼女の自己流というか、どこかで見たレシピをそのまま、だつたような」

「プロの監修なしで、コレか。へーっ」

安藤さんが隣で、非常に感心した様子で唸っていた。本人じゃないから詳細はよく分からないけど、姉や母の反応を見て微調整を積み重ねた可能性は、なくはない。直接、ああだこうだと言われている姿は見なかったように思う。

「やっぱり、才能のある旦那のところには、才能のある奥さんが嫁いでくるんだね」

「私たちには、長く引き止める才能がなかった、と」

朋子さんと安藤さんは、何やら笑い合っている。その真意は、聞かない方が良さそうだった。

一月二三日（水）

食卓で、テレビの前で遊ぶ子供らの様子を眺めながら、チャットツールやメールボックスを定期的にチェックする。会社員ではないから休日前ということもないし、向こうも向こうで祝日だろうと何だろうと仕事があれば動く人たちだろうけど、今日のところは、僕が送ったメールやメッセージに対して返事が来なければ、店仕舞いしようと思っっている。

キッチンでは芽衣が、晚ご飯のカレーを温めていた。

「明日までは残らないよね？」

僕は仕事用のツールを立ち上げたまま、明日や週末用のイベント情報を検索し始めた。芽衣はカレーをゆつくりかき混ぜながら、「うん、食べ切ると思う」と、換気扇の音に負けないように答えてくれた。

飯に残ったとしても、容器を移して冷凍でもして、一人前のカレーうどんにでもして食べるだろう。彼女のカレーうどんも美味いんだけど、僕は中々ありつけない。

食べ切るようであれば、外で晚ご飯を食べても良いな。ただ、二人を連れて夜の夕食はまだシンドいかもしれない。無理なく日中で引き上げて、夜は夜で何か考える方がいいのかな？

一人で妄想の世界に浸っていると、いつの間にか午後七時を過ぎていた。急ぎの用事っぽかったメールもチャットも返事が来ていない。メールは後日に返すとして、チャットツールの方はステータスを離席中に変更し、こちらも後は二四日の朝以降に返事する旨を送っておいた。

それぞれのツールを終了し、パソコンの画面を閉じた。娘が二人ともテレビに食いついているのを確かめてから、ササッと仕事部屋へパソコンを置きに行く。電気も付けずにドアを開け、机の上に置いて、横に放置してあった電源を繋いだ。通電のランプを確かめて、リビングから聞こえてきた芽衣の呼びかけに、「はい」と答えてそちらに戻る。

亜衣と映美は、二人ともいつの間にか両手をしっかり洗って、それぞれ自分の席についている。僕も一旦リビングに顔を出してから、洗面所で手を洗ってリビ

ングへ戻った。皆んなが待っている食卓について、両手を合わせた。亜衣の声に合わせて、「いただきます」と唱和する。

子供らの口に合わせた甘みの強いカレー。芽衣が入れてくれたビールを飲んだ。「やっぱり、全然違うよね」

芽衣は昼間に食べたカレーを思い出しているらしく、自分の作った二日目のカレーとビールを味わいながら、小難しい顔をしている。久々に食べた、しつかり辛くてスパイシーな大人向けのカレーは、流石にコレとは全く違う。カレーといえば、ほとんどコッチになって久しいお陰で、外で食べるカレーは非常に新鮮だった。

「コレはコレで好きだけどね」

僕がそう言うと、彼女は「まあね〜」と少々自慢げに言った。

「今年のカレーは、次が最後かな」

芽衣の言葉に、僕は「え、もうそんな時期？」と壁のカレンダーに振り返った。概ね月に一回のペースで出てくる我が家のカレー、次に作るとしたらクリスマスの時期か、完全な年の瀬か。

「チキンも、予約するならそろそろやんないとね」

芽衣はついでのようにボソッと呟いた。

そうだ。もうそろそろクリスマスの算段も考えないと。あつという間に年末進行も考えなきゃいけなくなってくる。今年のカリスマスはどうするか、毎年のように訪れる悩みの種が、今年もまたやってきた……。

初出 令和三年一月四日 NNN (旧サイト) にて公開

一二月一六日（土）

眠さのあまりグズっていた二人の娘と共に風呂に入り、入浴後の着替えと寝る前の歯磨きも済ませてベッドに連れて行った。普段ならばしばらく寝てくれない亜衣も、今日はすんなり寝入っていた。寝冷えしないように掛け布団をしつかりかける。

寝室で室内用の上着をパジャマの上から羽織って、リビングへ降りた。先日ようやく出して一所懸命飾り付けたクリスマスツリーがテレビの前でドンと存在感を誇っている。

芽衣は、どうやら僕たちと入れ替わりでお風呂に入ったらしい。風呂場の方からそれらしい音が聞こえてくる。僕は音量を抑えてテレビを付け、適当なザッピングを経て、地上波放送らしい映画に合わせた。まだ始まったところだろうに、何が何やらよく分からない。

キッチンへ入って、何を出すか考える。先月飲み切らずに仕舞ったままになっていた、安物のワインが残っていた。今年のボージョレだけで良かったのに、欲を出したせいでそのままとは。

ズボンのポケットからスマホを取り出し、「グリュウワイン」で検索した。スーパーで買えるパウダータイプのスパイスばかりだけど、適当に作ってなんちゃってで飲む分には事足りる。

「ホット赤ワイン」のレシピに則って、小鍋にワインを注いで火にかけた。子供たちに素直に寝てくれよと願いながら、換気扇のスイッチを入れる。しばらく聞き耳を立てていても、上から降りてくる気配はなさそうだ。レシピ通りにはちみつや生姜、スパイスを加えて火を強める。沸騰直前で火を止めた。オレンジやレモンのスライスなんて、常備していない。冷蔵庫に残っていたマーマレードを取り出して、目分量で入れてみた。

「何してるの？」

肩にかけたタオルで髪を拭きながら、芽衣が「良い匂いね」とキッチンへやって来た。

「ホットワインでも、と思って」

「あら、良いじゃない」

芽衣は「ちよつと待つてて」と言い残し、寝室へ上がって行った。そつちから、ドライヤーの音が微かに聞こえてくる。僕は小鍋の火をとろ火にして再び点けた。温度が下がりすぎない程度に時々軽く揺すつて、ツマミを何にするか考える。

確か冷蔵庫に、朋子さんからいただいた良いチーズが入っていたような。ドアを開け、中を入念に探っていると、芽衣が後ろから「何を探してるの？」と声をかけて来た。

「チーズつて、どこだっけ？」

「あのチーズは来週まで取つとかない？ 折角のクリスマスだし」

芽衣は僕の同意を待たず、ぬるりと冷蔵庫のドアから僕の手を離してそのまま閉めた。芽衣は食卓に放り出したままのビニール袋を探り、チーズのおかきを取り出した。

「コレにしない？」

実家から適当にもらつて来たお菓子の中から、ホットワインに合いそうなツマミを見繕つて、チーズのおかきも含めて適当なお皿に開けてみる。ワインを普段使いのマグカップに入れ、先に座つていた芽衣の向かいの席に座つた。

僕から自分のカップを受け取つた芽衣は、「お疲れ様」と乾杯して、一口飲んだ。

「マーマレードがちよつと甘いかな」

彼女の感想に僕は疑問を抱きながら、味を確かめてみる。蜂蜜の甘さにマーマレードの甘味も加わつて、確かにちよつと甘さが強い気もする。

「レモン汁でも足す？」

「このままでいい」

ちよつと酸味を加えればバランスは整うのに、立ち上がりかけた僕を制して、彼女は自家製ホットワインをもう一口飲んだ。小包装のお菓子をツマミ、口に放り込む。

「来週にはクリスマスで、あつという間に年末か」

芽衣はカレンダーを見ながら、気の抜けた声で言う。クリスマスが終わればツリーの片付けが始まつて、すぐに大掃除とできる範囲でのおせち作り。その先も何となくで思い描きながら、ホットワインの甘さと口の中に残るマーマレードの皮が気になつて仕方がなかった。

初出 令和三年一月二十五日 ㄣㄣ (旧サイト) にて公開

二月三十一日(日) 午後一〇時

紅白の途中で子供達とお風呂に入り、ニュースで中断される頃には二人ともベッドの上で寝息を立てていた。中々寝ないと必死に寝かしつけ、一緒に寝落ちしていたのが懐かしいぐらい、最近はスツと寝てくれている。

夕飯の片付けと、明日以降の段取りを終えた芽衣が、遅れてお風呂に入っている。僕はその間に、食卓へパソコンを持ち出して、SNSをチェックしていた。今年を締めくくるブログも投稿し終え、それに因んだ投稿をそれぞれのSNSで発信する。

サツと返せそうな返信もいくつか終え、芽衣がお風呂から上がってくると同時に、パソコンの電源を落として、寝室へ片付けに行った。リビングへ戻り、水分補給を済ませてトイレに立つ。用を済ませて出てくると、芽衣もしっかり寝る準備を整えていた。

僕は彼女の視線に気が付き、「ああ、ごめんね」とトイレの前を空けた。

「先に、ベッドに入ってる」

芽衣は僕に頷きながら、トイレのドアを閉めた。普段からするとまだまだ寝るには早い時間だけど、かなり眠そうな顔をしていた。僕は彼女に宣言した通り、一足先にベッドへ入った。

スマホを充電しつつ、改めてきつき投稿したブログ記事をチェックする。編集長をやっているメディアサイトでは校正もすっかりやっているのに、個人のブログだと何故か誤変換や引っかけかかる表現がチラホラ見つかる。セルフチェックの甘さを実感しながら、「今日は修正しない」と改めて心に決めた。

芽衣があくびを噛み殺しながら寝室へ入ってきた。トイレと歯磨きにしては、随分遅かったような。僕がスマホを持ったまま彼女を見つめていると、彼女は

「戸締りも確認してた」と小さな声で言った。

「ああ、ありがとう」

「どういたしまして」

芽衣はそのまま、ぬるりと僕の隣へ入って来た。僕はスマホを枕元に置いて、しっかりと布団の中へ身体を収める。足先の方はまだまだひんやりしていた。芽衣

は僕の横で、スマホと置き時計のアラームをそれぞれセットする。

「まだ十時か。明日が早いって言っても、流星に早すぎるかな」

「そう？ 大晦日だから早い気がするけど、こんなもんじゃない？」

芽衣はすつぽり肩まで布団に収まって、仰向けに天井を見つめている。僕はその横顔をジッと見つめた。

「なあに？」

「別に。なんでもない」

芽衣は大きなあくびを一つすると、そのまま目を閉じて身体を向こうへ向けた。僕はそれを、後ろから抱きしめる。彼女の温かみと匂いを感じながら、裡なる睡魔の到来を待った。もうしばらくは訪れそうにない。

とりあえず、枕元のリモコンに手を伸ばし、部屋の照明を落とした。常夜灯も点けない部屋の中は真つ暗だ。暗がりを見つめながら、今年の出来事と来年の出来事を改めて思い描く。

思い起こせば色んなことがあった。自分のことも、親族のことも、仕事間のこととも色々あった。来年もきつと、色んなことが起こるだろう。心配なことも不安なこととも沢山あるけど、痛々しさを手放さずにやっていこう。オレの人生、まだまだこれからだ。

(完)

初出 令和三年二月二四日 NNN(旧サイト)にて公開